

# 笛と太鼓の保姆養成所

—(回想の二)—

岸 邊 福 雄

× 明治三十八年に、高等科保姆養成所を、納戸町の例の住宅兼用の幼稚園内に創設しました。

所が、高等科と言ふ宣傳が、果して功を奏して、日白の女子大學の卒業生や、静岡女子師範卒業生の方達が、九名集つて來た。養成期間は六ヶ月と言ふのである。

× 教育學は、東京府女子師範の佐藤憲治先生に、心理學は、高島平三郎先生に、彩色の原理は、只今の東京女子高等師範教授菅原教三先生に講じて戴いた。

菅原教授は、其當時、大學卒業早々のお若い美しい方であつた。今こそ長い髻を伸ばして、關羽のをぢさんの様に威儀嚴然たれども、僕の養成所の講師の時、實に水々し

いほぎの貴公子であつた。それも、懐かしい思ひ出である。

× 尙、珍學科は、笛を吹き太鼓を打つ、樂隊ごつこの稽古であつた。今日の諸方の女學校に採用されてゐる鼓笛隊である。

× 其講師が、近衛軍樂隊長さんだ。

一週に二度も、軍服の隊長が、稽古に來て下さつた熱心は、練習生一同が、いつも感激した。只だ感激はし感謝はしたが、一向上達はしなかつた。初は笛が六づかしかつたが、後には太鼓が六づかしがつた。成績は、終に見るべきものなしに及弟して、免狀には相當上達したやうに書いて渡した。

今日になつて見るに、あれもこれも皆んな笑草である。

× 保姆の養成所は、東京府教育會が、多田房之助氏の幼稚園で開いてゐる位で、あまりに保姆の志望者もなく、必要もなかつたのであつた。

× 全國の幼稚園數は僅に八百を稱されてゐたのであつた。

× 其頃のお茶の水の幼稚園主事は中村五六氏であつた。東基吉氏も關係されてゐた。尙和田實氏も、其頃加はられた。お茶の水幼稚園には天下の幼稚教育の權威が集つてゐられた。

× ここでは、何んさか言ふ、全國の保姆に對しての雑誌が發行されてゐた。

× 僕は、三十八年に『明治の家庭』と言ふ三十二頁の家庭教育本位の雑誌を、單獨で發行した。編輯長も發行人も發行者も、販賣も、配發も廣告取りも、只だ一人で働いた。幼稚園は無論朝から終はりまで、主任保姆であつた。

× 『明治の家庭』と、同時代に羽仁も子女史が編輯を引受けてゐられた内外出版協會の『家庭の友』が、家計を主と

して賣り出してゐた。尙ほ名文を以て、母性を指導してゐた『家庭雜誌』と言ふのがあつた。堺枯泉氏の編輯であつた。

× 私の雑誌は、毎月最初は一萬部發行した。其内四千部を寶文館で賣つてくれたが、残り六千部は直接郵送した。

× 其帶封を、家内が、一日に二百枚平均に書いた。

× 此帶封毎日二百枚宛書く事は、容易ではなかつた。時には、あかんぼをお負つたまま書くのは、まだしも、時には園兒の特技を教へながら書いたり、庭でブランコや砂遊びをするのを見ながら書いた事もあつた。併し、大抵は、あかんぼを寝かせ付けてから書いた。

× 其拙早の筆が、其當時は間に合ひはしたが、終に惡筆になつて懇意な人様に出す手紙にすら、赤面する今日になつた。

× 此の雑誌で、幾らかの利潤はあつた。それが、幼稚園の經營力になつたのであつた。全く、自給自營の幼稚園であつた。

これと思ひ出すにつれ、夫妻共、健康そのものであつた事を感じるのであります。全く夫婦幼稚園であつた。

×

私が、東京に出ます時に、恩師田中勝之丞先生が、小學校員や保姆は、世間を視る眼界が狭い。幾ら友達同士で研究してゐても、其進歩其成績に見るべきものが乏しい。東京に出たら、偉らい先生や學者や政治家や、藝術家や宗教家や、思想家の間に混じて、黙々として高説佳談逸話等を聴聞せよ。と、諭された。

×

其の恩師の教訓に隨つて、各種の學者名士の間に入れて戴いたものの、あまりに、基礎知識のないのに恥かしさをさへ覚え勝ちであつた。

終に、お辨當持の役も勤まらないさまでに失望した。

×

さあ、夫れからが、孤立無援の、ひこりぼつちの境遇に、自らを置いたのである。

×

繁華な廣小路は、皆様の後さへ追ふて歩けぬ、と自覺するに、夫婦連れで、裏の田圃路に出た。なる程人通りは少ない。道も畦路で足元も危ぶまない。

よし心得た、と、一さ足一さ足に力を入れて、急がずあせ

らず、踏みしめ踏みしめ歩らした。

×

進みの遅い事、龜のそれにも及ばない。半ば踏みしめた一足は、後にはさがらなかつた。往く手は遠い。兵糧は久しい。二十時代から、一生の事業として、自ら念願して創めはしたものの、幼稚園經營難は身にしみて來た。

倦怠期は、將に來た。

友達は、上の學校を卒業して、年々共に榮進して往くの引き代へ、私は、相變らず、田圃の畦路をさぼ／＼歩いてゐた。

×

常に、人里を離れてはいけないと、自ら誡めてゐた。人里を離れては、やがての時期に遅れて終ふからである。

×

田圃路、人通りは少ないが、其の往く先には、小さいながらもタンポポも咲いてゐた。スミレも咲いてゐた。レンゲ草も咲いてゐた。畦の溝川には、鯉も鯛もゐなかつたが、目高やぎぜうは、頭を上げて話しかけて來た事もあつた。それが、倦怠期に陥つてゐた幼稚教育者を慰めもし、鞭撻もして呉れたのであつた。

自然は人を育てるか―感激の至りである。(二、五日)